

瀋陽駐在員事務所

国慶節の訪日旅行者

写真は、私が先日一時帰国した際、携帯電話の SNS メッセージに入ってきた中国人旅行者向けのクーポンです。中国の通信会社利用者が日本へ入国し、日本の通信会社回線に切り替わると自動的に送信される仕組みのようです。画面を提示するだけで粗品がもらえるクーポンも付いていて、「おまけ大好き」な中国人の心をくすぐる巧い方法です。

瀋陽日本総領事館によると今年 7 月末の時点で訪日ビザ発給件数は昨年 1 年分を突破（総発給件数は非公表とのこと）、先日話を聞いた瀋陽の旅行会社でも「今年は過去 7 年で日本ツアー利用者が最も多く、同社だけで約 3,000 人が既に訪日した」そうです。

旅行会社にもそれなりの苦勞もあるようで、ドタ・キャン防止のため航空会社に対して 2 か月前から保証金を積む必要があるほか、自社ツアーで日本上陸後に逃亡者が出るとペナルティーとして一定期間日本総領事館からのビザ発給が受けられなくなるため、素行に不安のある利用者からは 5 ~ 10 万元（約 10 万円 ~ 20 万円）の保証金や所有の不動産証明書を預かる等の逃亡防止策を取っているそうです。



中国移动(通信)
= (中国大手移動通信会社)
「訪日旅行節約大攻略」
DOCOMO を選択、LAOX で
の買い物で消費税 8% 免除
さらに 1 割引優待券

南 敏律

ユジノサハリンスク駐在員事務所

【チェーホフとサハリン】

最近、ユジノサハリンスクに面白い像が出来ました。チェーホフ公園を散歩すると、19 世紀の服装をした女性銅像がベンチに座り、隣に男性の銅像が挨拶しているかのように立っています。

サハリンと関わりの深いアントン・チェーホフの作中人物です。彼の戯曲「かもめ」、「桜の園」、「ワーニャ伯父さん」は世界中で演出されています。1890 年に流刑地であったサハリンを旅行、現地初の人口調査を行い、「サハリン島」旅行記を執筆しました。日本語でも樺太時代から出版されています。

サハリン全島から尊敬を集め、チェーホフ劇場、チェーホフ博物館、チェーホフ公園、チェーホフ通り(当行事務所が面する通り)などが、彼の名に由来します。

市民・観光客に撮影スポットとして親しまれ、19 世紀の小説登場人物がいる公園を歩くと、楽しくて気持ちがいいです。サハリン州民の知識を深めるとともに、市内を綺麗でユニークにするのは素晴らしいアイデアだと思います。



マリア・ヤロヴェンコ

ウラジオストク駐在員事務所

ロシア極東史上初のオートオークションについて

10月3日、自動車や建機の販売を扱っているテクノホールディング・スモトリはウラジオストク郊外においてロシア極東史上初のオートオークションを開催しました。

会場となった旧ウラジオストク空港ターミナルは、全ての国内・国際便が移った2012年からずっと放置されていましたが、2014年、同社に買い取られ、「スモトリ・オートポート」へと改称されて以降、自動車販売拠点として利用されてきました。

上記のオークションの仕組みは日本国内の中古車オークションとほとんど変わりません。

今回のオークションは延べ156台(4輪車59台、2輪車97台)が出品され、20台の車両が落札されました。この実績はそれほど高くはないかもしれませんが、前例のない全く新しい試みでもあり、ロシア国内におけるオートオークションの知名度の低さを考えると、逆に潜在成長力がそれだけ大きいと言えます。スモトリ社は、今後2週間に1回のペースで同様なオークションを開催し、対象車両を建機やキャンピングカーまで拡大しようとしており、10月17日に開かれる次回オークションも大きな注目を集めそうです。

イワン・モズゴヴォイ



カシコン銀行

「観光王国タイの底力」

8月中旬の爆弾テロ事件から早2ヶ月が経過しました。タイの主要産業である観光産業への打撃を懸念されていたものの、結果を見ると、8月単月の外国人観光客数は前年同月比で24.7%増の約260万人(タイ観光・スポーツ省発表)と好調に推移しているようです。日本と比較すると、8月単月では前年同月比63.8%増の182万人(日本政府観光局発表)と過去最高を記録した8月単月実績と比較しても大幅にタイが上回っており、さらに、近時のニュースでは中国の国慶節(建国記念日)に合わせ、単月90万人近い中華圏観光客数が30%増との記事もあり、さらに増加する見込みとなっています。

年間約3,000万人の外国人観光客を受け入れるタイではGDPの約10%が観光産業で占められています。また、タイ人の国内旅行振興も非常に積極的で、飛び休となるようなカレンダーの場合、連休で挟まれた日を公休日としてしまうこともあります。来年度も既に公休日とすることが検討されている日が2日あり、国内旅行も奨励されています。

日本人としては違和感を覚えるような奨励策ですが、世界トップ10に入る観光大国タイを見習うべきところは多くあるのかもしれない。



タイ人気観光地の一つ
プーケットのピーピー島



タイ国際スワンナプーム空港

伊藤 彰浩

日中経済協会 北京事務所 札幌経済交流室

外国で体調を崩したら...

中国・北京に赴任してから約 6 ヶ月と生活環境にも慣れてきた頃、ついに体調を崩し現地の病院へ行くという体験をしました。こういう場合、日本の駐在員の多くは、「医療仲介サービス」というものを利用します。病院での受診が必要な際、契約の会社へ電話し病状を伝え、それに対応してくれる病院を紹介してくれます（全て日本語対応です）。そして、病院に着くと会社の担当者が待っており、医師との通訳、保険金請求の手続き等を全て代行してくれます。



中国で処方された薬

ここまでお読みいただくと、「外国で体調を崩しても問題ないではないか」と思われるかもしれませんが。然しながら、小職が体調を崩したのは夜間のため、受入可能な病院が限られている、専門医が不在のため総合医の診断となる、等の問題が発生しました。そして、病院に着くや否や、診察する医師がパキスタン人ということが発覚。日中英の3ヶ国語通訳（通訳者2名）で病状を伝えることとなり、「小職の日本語は正確に伝わっているのだろうか？」と、本当に不安になりました。

外国で生活する場合、現地の言語をネイティブ並みに話すことができれば、今回の事態に限らず大抵のことは問題なく対応可能かと思いますが、小職を含め多くの駐在員は、「誰かの力」を借りなければ安心して生活することはできません。そんな当たり前のことを再認識させられた出来事でした。

小笠原 宅麻